

名古屋芸術大学グループ 38 January 2017 通信

Close up! NUA-ism

～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-OB

死んでもいいから好きなことをやりたい
荒川「B」琢哉

NUA-Student

音楽学部
サウンドメディアコース 4年
野田輝

News/Topics

ニュース&トピックス

音楽学部

- ジャズ・ポップスコース公開講座
菊田俊介氏による
「ブルースとファンク・ロック音楽の世界」を
開催しました
- デンバー大学ラモント音楽院・
名古屋芸術大学音楽学部
交流演奏会を開催しました
- 音楽学部主催
室内楽の夕べ 2016が行われました
- 名古屋芸術大学オーケストラ
第34回定期演奏会を開催しました

美術学部・デザイン学部

- 瀧田家アートプロジェクト
ートキラムスプーが開催されました
- テキスタイルデザインコース
尾州毛織物プロジェクト2016
特別客員教授 宮浦晋哉氏による
デザインチェックが行われました
- シヤチハタ株式会社×名古屋芸術大学
産学連携ワークショップ
学生のアイデア提案が商品化されました
- 絵本作家 三浦太郎展
こどもアイデンティティ
～「Je suis…」から「そうちゃん」までが
開催されました
- 官学連携活動
北名古屋市×名古屋芸術大学
北名古屋市市制施行10周年記念事業
原付バイクナンバープレート
の完成披露が行われました

名古屋芸大グループ校特集

- 名古屋芸術大学附属
クリエイション

コラム NUA

大学の生き残り策 全国調査から
人間発達学部教養部会 教授 赤井朱美

Master Artist

マスターアーティスト
普遍的価値
美術学部 教授 田口貴久

Information

インフォメーション

- 出版
- 2016年度音楽学部演奏会スケジュール(予定)
- 2016年度名古屋芸術大学卒業制作展・
大学院修了制作展日程



Feature 新たな夜明け

Go beyond the BORDERLESS

その先に



名古屋芸術大学グループ

<http://www.nua.ac.jp>

■名古屋芸術大学・大学院 音楽研究科 学部:音楽学部
美術研究科 美術学部
デザイン研究科 デザイン学部
人間発達学研究科 人間発達学部

■名古屋芸術大学保育専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエイション
■滝子幼稚園 ■たきこ幼児園
■名古屋音楽学校(名古屋芸術大学 東ラザライド)



新たな夜明け

Go beyond the

BORDERLESS

その先に



2017年度(平成29年度)、本学は大きな学部改編を行います。音楽学部、美術学部、デザイン学部の3学部4学科を統合し、新たに芸術学部芸術学科を設置。1学部1学科、4つの専門領域へと改編します。これまで本誌では、竹本義明学長と改編を担当する津田佳紀副学長、萩原周改革準備室長に改編の意義と目的を(Vol.35)、新設されるリベラルアーツコース、文芸・ライティングコースの内容について、それぞれ茂登山清文教授、萩原雄一教授にお話を伺って来ました(Vol.37)。これらで、枠組みとしての「芸術学部」は見えてきました。しかし、実際に講義が始まり、新しいカリキュラムを受講した学生にどんなことが起こるのか？ さらに大学、教員にどんな変化が起こるのか？ 実際に改編したことによる効果とはどんなものなのか？ 疑問は尽きません。始まってもない学部統合後のことを予想することに無理があるのは承知の上で、BORDERLESSのその先、名古屋芸術大学の未来について考えてみました。

ここからが
本当のスタート！



萩原 周 改革準備室長
学長補佐
デザイン学部教授

になる」、「英語」、「日本語表現」、「情報メディア演習」を置き、それ以外を選択科目としています。そして選択科目の中に従来の教養科目、および各専門領域の科目等が入っています。目下、各専門で設計していたカリキュラムをさまざまな観点から検証し、それらを新しいカリキュラムとして成立するようさまざまな調整をするという作業を行っています。

単に、これまでの専門のカリキュラムを他の領域の学生が履修できる可能性を広げるといっただけではなく、新たな構想があるのですか

従来、芸術大学の卒業生は、演奏すること、描くこと、あるいは芸術的な素養を使って構想することなどが能力として期待されていました。反面、事務処理能力であるとか、語学力といった、現代社会においてより要求度が高まってきている能力の期待値はさほど高いものではありませんでした。そこで新しく芸術学部に入學する学生たちが身に付けていくことは、社会人としての基礎力を高める能力や常識を一般大学の学生にも大きく引けを取らないようなかたちにし、そこにさらにこれまで通り芸術大学卒業生としての専門性をしっかり身につけた人間を育成していこうというものです。これを実現するために必要なカリキュラムは、従来の芸術的な素養を養うものに特化したものに新しいカリキュラムをプラスしたものである必要があります。ここで問題が生じます。芸術学部の必須科目では、既存の人間発達学部とも共通となることから、限られた条件の中で、人間発達学部も加え、学

年で500名近い学生に対してどうやってこのカリキュラムを実施するか。単純にスペースの問題もありますし、内容についても適切に設定されたクオリティーを満たすものにしなければなりません。カリキュラム全体を、効率のいい、効果的なものに上げる必要があります。ですので、そのための調整を行っています。それぞれの領域で行われているカリキュラムの内容を精査していかに効率よく、かつ教育の質を高める方向に運用できるか、さまざまな部署との意見交換を行いながら進めています。

学部がまとまるということで、例えば美術領域の学生でも一定の条件のもとで音楽の専門性の講座を受講することができるようになるわけですね。横断的な取り組みとして、カリキュラム上で何か特色はあるのでしょうか

4月から新しいカリキュラムがスタートします。スタートしますが、BORDERLESSを旗印にしたこの改革の成果は4年後、最初の卒業生を出したところで明らかになるわけです。修学上必要な事項を定めた学則科目は、改正後は完成年度まで、つまり4年間に変更することができません。ですから今回の改編によるカリキュラムの成果は、4年後になって初めて評価ができるわけです。とはいえ、成果をより早く見込める科目もあります。全学総合共通科目の横断科目群には、各専門から全学に開いて配置された科目が並びますが、中でもアートプロジェクトという科目に期待しています。それぞれ専門性を持った学生が集まりひとつのプロジェクトと

いよいよ4月から新しいカリキュラムが始まります。今の状況について教えて下さい(取材は2016年12月)

美術、デザイン、音楽学部を統合し、新たに芸術教養領域を作りました。枠組みを考えて、文部科学省に申請し、設置基準を満たしているということで正式に開設。そういうことでスタートにこぎ着けたところです。諸々の計画に必ずしも十分な余裕があったわけではなく、短い時間の中で練り上げてきましたので、まずは4月から無事にスタートを切ることができることでひとつ課題をクリアすることになります。その上で現在行っていることは、カリキュラムの調整です。芸術学部では従来のカリキュラム、3領域を統合して、これに新たに加わる芸術教養領域を加え、学則上のカリキュラムとしては、一つにとりまとめられています。このカリキュラムでは、大きく必修科目と選択科目に分けるとすれば、学部共通の必修科目として「大学生

芸術学部 芸術学科 NEW

- 音楽領域
- 美術領域
- デザイン領域
- 芸術教養領域 NEW

人間発達学部

- 子ども発達学科



して何かを作っていく、そういったカリキュラムです。じつは、これまでもアートプロジェクトの実施内容に準じた活動は本学で既に行われてきましたが、夏期や冬期の休みを利用して、また単位認定されないもので、多くのプロジェクトは活動趣旨に共感する教員同士の個別のつながりでできあがったものでしかありませんでした。それを来年度からは、カリキュラムの中に組み込んで大学としてもしっかりとサポートしていくかたちを取ります。例えば、文芸・ライティングコースとミュージカルコースの学生が連携してイベントを計画・運営するとか、あるいは、リベラルアーツコースがコアとなって音楽と芸術を集約した活動を新たに立ち上げるとか、そういう企画ができるようになります。これまでも領域ごとには地域との結びつきや企業との連携などでさまざまな試みを行ってきました。それらを大学としてもっと積極的に行っていきます。地域や企業との関係を橋渡ししたり、取り組みそのものを大学が組織として応援していけるようになればと考えています。

美術領域だけでなく音楽とも積極的に係わりが持てる領域はたくさんあると思いますので、東キャンパスと西キャンパス、物理的には2キロほど距離がありますがこの距離感を学生たちの連携の生み出す活力や、コンテンツで埋めていく必要があると考えています。

音楽、美術、工芸、教職課程はこれまで通り

従来は単位に含まれていなかった活動が認められるようになるわけですね。他領域との連携を

増やしつつ、これまで通りの専門教育も新たな教養もということになると、講義の効率も良くなる必要がありますね。

もちろんこれまで通り、音楽領域、美術領域では、プロフェッショナルなアーティストとして活動していける人材を輩出していきます。デザイン領域でも先端的なことに取り組む卒業生を輩出していくということは、これまでと変わることなく目指していかなければなりません。1つの学科に、本学が採用する4領域があるような大学は、全国的にも珍しい存在です。従来の音楽、美術、デザインの3つの領域で、それぞれ教員免許を取得するための課程申請も行いました。先例がなくこれはなかなか神経を使う難しい試みでしたが、皆様のご協力で無事にクリアすることができました。美術、音楽、工芸、これらの免許をひとつの学科で取得する申請行為は、これまでの常識では考えられない本学のひとつの大きな特質となりました。そういう意味においても、改編はほぼ当初思い描いていた通りの枠組みを作ることができましたし、それを国としても公式に認めていただいたこととなります。それだけに今後とも全体を見直し大学教育のグランドデザインを描き、推進する人材がいないと、せっかくの可能性に満ちた仕組みも意味がなくなってしまいます。各領域はもちろん、さまざまな部署を率いる先生方にはものすごくプレッシャーがかかってくるでしょう。そこでは自分の専門だけを考えるのではなく、いかに芸術学科という中でものを考えていけるか、全教員がこうした意識を持つことが重要になります

が、特にそこでリーダーとなる先生方になるほど、いつもそのことを念頭に教育環境について考えていなければならないのです。

枠組みは、いよいよ整ったということですね。

これまで通りの専門性と芸術全般への素養、さらに社会で必要とされ、卒業生がそれぞれの夢を実現させる礎となる教養、これらを教育の中で達成していけるような仕組みを構築していく、これをこの4年間で、より目的に近づけなければなりません。もうほんの数ヶ月後の4月からは、この新しい枠組みで学ぶ学生が入学してきます。これにしっかりと応えていけるようなカリキュラムであり組織を構築していけるように、教職員側も意識を新たにしていかなければなりません。ここまでは学校のかたちを整えることでした。ようやく枠組みは整いました。これからはその中のエネルギーといいますか、それを新しい枠組みに結びつけていくことが必要です。個々の教員や、その集団が培ってきた教育資産であるとか、個別な専門性という宝物を、教育力、ひいては大学のブランド力につなげていくことが大きな仕事ではないかと思えます。

新しい枠組みができた上で、入学してくる学生はもちろんのことですが、教職員側にとって新しいやり方で新しい卒業生を輩出していくんだ、という強い意識がやはり必要です。今後改革を成功に繋げるためには、これを支える側にもこの新しい「BORDERLESS」という改革に希望を感じるような、さまざまな角度からの施策も必要ではないかと感じています。

緊急座談会 BORDERLESS その先へ

～新しい芽はここにある～



松岡 徹 | 美術学部 准教授

1968年 愛知県岡崎市生まれ
 1991年 名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース卒業
 1992年 名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース研究生修了
 1998年 パリ国際芸術都市(フランス)に短期滞在
 2004～2005年 スペイン国立バルセロナ大学大学院に留学
 2001年からアートによる地域活性化事業「三河・佐久島アートプラン21」に係わる。現在も継続するこのプロジェクトは全国的にも有名になり、島に点在するアート作品を巡るために多くの観光客が佐久島を訪れるようになった。社会とアートをつなぐ取り組みとしてひとつのモデルとなっている。

「基本的に美術館やギャラリーで作品を発表するのが作家の仕事です。ただ、おそらく時代がギャラリーや美術館に行くということをおもしろくなくなってしまい、一般のお客さんが美術館に見に来なくなってしまいました。それで、僕らのちょっと上の世代の先輩たちが、作品を美術館の外へ持ち出しました。ちょうど僕が大学を卒業した頃からそういう動きが始まり、僕はその動きに合わせるように作品を作ってきましたので、佐久島のアートプロジェクトに大きく係わるようになったのだと思います。最初はそこに作品を提供するというだけでしたが、だんだん、どうす

れば島に人が来てくれるのか、アート以外の部分で島の歴史や魅力は何とか、求められることが変わってきました。僕としては、僕の制作自体も、自分の持っているアートの力をどうやって使っていけば自分も生きる島も生きるかということがテーマに変わっていきました。自分を表現したいということだけではなく、それをどうやって社会で生かしていくか、どうすればもっと社会にアピールできるのか、あるいは社会に喜んでもらったり使ってもらえたりする存在になれるのか。そういったことも考えてもらいたいと思って授業をやっています」



水内智英 | デザイン学部 講師

1981年 岡山県生まれ
 2003年 武蔵野美術大学 造形学部 基礎デザイン学科卒業
 同年 同校 基礎デザイン研究室に勤務
 2004年 渡英、ロンドン大学 ゴールドスミス校 大学院入学
 デザイン理論を研究
 2005年～ 大学院と平行して、ロンドンのデザイン会社へ勤務
 2008年 帰国、Wieden+Kennedy Tokyoに勤務。
 広告デザインを手がける
 2009年 no problem LLC勤務
 新しい社会とデザインの関係を模索する様々なプロジェクトを行っている。

「現在、デザインの枠組みそれ自身が、少し制度疲労を起こしているのではないかと考えています。社会の枠組みが変わってきているにもかかわらず、デザインの考え方は変わっていません。例えば、産業の中で成立してきたデザインが、産業自体が変わっているにもかかわらず変わっていないとか、デザインの考え方は近代というものに近しいものですが、近代が移り変わっていついものにもそのまま続いているとか、といったことです。それに對し、もう1度デザインをデザインする、デザインはこうあるべきじゃないか、こんなあり方もあるよね、

ということを研究し実践しています。現在は、社会の問題が複雑化しています。単純に原因と結果がわかっている世界ではありません。何がインプットになって何がアウトプットになるかわからない、複雑な世界となつています。例えば、環境問題もそうですし、仕事や学校で心を病む人の問題もそうだし……、こうした複雑な問題に對しデザインは何も処方箋を持っていません。そういうことを踏まえ、もう1度社会の中で、デザインの立ち位置を考え直すということをやっています」



長江和哉 | 音楽学部 音楽文化創造学科長 准教授

1973年 愛知県生まれ
 1996年 名古屋芸術大学音楽学部音楽科卒業
 同年～ 録音スタジオ勤務、番組制作会社勤務
 2000年 録音制作会社を設立
 2006年 名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科 専任講師
 2012年4月から1年間、名古屋芸術大学海外研究員としてドイツ・ベルリンに滞在し、ドイツの音楽大学で始まったトーンマイスターと呼ばれるレコーディングプロデューサーとバランスエンジニアの両方の能力を持ったスペシャリストを養成する教育について研究調査。現地のトーンマイスターとも交流を持ちながら、室内系からオーケストラまでの様々な録音に参加。

「現在の音楽と電気技術やメディアとの関わりは、20世紀前半までと比べると、大きく変化しています。ポップスでのこれらの役割はいまでもなく、クラシックの流れに沿った現代音楽やメディアアートの分野でも芸術表現に用いられており、以前とは大きな違いがみられます。また、録音や音響技術が発達したことで、本来「その場」でしか体感できなかった「音楽」を、世界中でリアルタイムに楽しんだり、過去に遡って聴くことができるようになりました。私の担当はサウンドメディア・コンポジションコース、専門分野は「音楽録音」です。音楽録音とは、作曲家や演奏者

が求めるその音楽にとってもっとふさわしいかたちで記録し、様々な人に届けるという分野です。これまで日本の音楽大学では、音楽をどのように芸術的に録音し伝えたらよいかについて教育・研究することは多く行われてきませんでした。しかし、海外に目を向けるとドイツ・イギリス・オーストラリアにはトーンマイスター、アメリカにはミュージックプロダクション&エンジニアリングなどの教育体系があります。今後、日本でもこれらと同じレベルに持つていくことはなかなか容易ではありませんが、音楽大学でのこれらの教育をもっともっと広げていきたいと考えています。」



早川知江 | 美術学部 教職部会 准教授

1977年 愛知県生まれ
 2005年 シドニー大学(オーストラリア)に交換留学
 2006年 東北大学大学院国際文化研究科博士課程修了
 同年 名古屋芸術大学(美術学部)、名城大学(理工学部)、中央大学(生命システム工学部)非常勤講師
 2007年 名古屋芸術大学(美術学部)講師
 2017年4月からはリベラルアーツコースへ
 専門は言語学。言語学の主流的な考え方であった「生成文法」ではなく、「選択体系機能理論」という社会的な状況においてそれぞれの場面にふさわしいことばや文法、色、音、形など使い情報を伝達しているという考え方を研究する。

「選択体系機能理論の面白いところは、ことばだけではなく画像なども一緒に扱っている理論ということです。言語と一緒にそれ以外の画像も同じ枠組みで分析することができるのです。そこから派生して、私はその両方を使って何がしたいと考えました。それで最近では、絵本の研究をしています。絵本は、絵もあって物語もある、絵とことばの両方を使っています。絵本というものはお話で書いてあることがそのまま繰り返されているのではなく、お話とはむしろ別のことが絵にしています。そのギャップから皮肉やジョーク、面白さを感じたりします。そういった技術でどうやって人を楽しませるか、そういう機能がどうやって生み出されているか、そんなことを研究しています。しかし、言語学というのは、ことばでも、画像でも、絵本でも、すべてあるものを分析することしか働いていないことに気が付きました。差で働いていることまわりには、実際に絵を描いている人たちがいる、実際に自分で作品を作っている人たちがいます。そこにできあがったものを分析している私がいいます。一緒に働けたらきっと面白いことができるんじゃないかと考えています」

アカギはプロジェクト

「お忙しいところ、ありがとうございます。本日は、「BORDERLESSのその先へ」ということで、若手の先生方にお集まりいただき、ちょっと先のことを考えてみたいと思います。事前に改革準備室の萩原先生にお話を伺ったところ「枠組みは整った、これからが本当のスタートである」という旨のお話がありました。たしかに、カリキュラムを改正し4年間やってみて評価、さらにその結果を反映させて調整、また4年して評価、ということになるので、改革の成果がより明確に固まってくるのは最短でも8年ということになるでしょうか。こうしてみると、大学

の変革は10年単位で考えるべきものということがよくわかります。さて、そこで10年という単位でものを考える時に、現在30代、40代の先生方の活動や、考え方が大きく大学に影響してくると思われれます。それで、今回は皆さんに集まっていただき、これからの名古屋芸術大学について考えてみたいと思います。始めに「BORDERLESS」ということで、来年度から学生は一定の条件のもとではありますが領域を超えた選択ができるようになります。これまでも学部を超えてプロジェクトを行うようなことがあったと伺っています。これまで係わってきたBORDERLESSな活動について教えてください。

水内: 僕がこの大学に勤めだした時の感想として、専門分野がしっかりと確立している半面、それぞれが少し分かれているのではないかと、という印象がありました。加えて、他者と上手く協力していくような体験がなければ、卒業生たちが社会に出たとき苦労するのではないかと、とも思いました。専門は専門で深めていく必要がありますが、それを横につなげていくような取り組みがあればもっとうまくいくのではないかと思います。いろいろなところに協力を仰ぎ、特別客員教授の服部滋樹先生、ライフスタイルデザインの萩原周先生、スペースデザインの駒井貞治先生らと一緒に、いろんな学部のいろんなコースの学生が係られる地域プロジェクト

●土と人のデザインプロジェクト





トをやろうと思い、「土と人のデザインプロジェクト」を始めました。そのプロジェクトの中で「晩餐会」を開きなさいというお題を与えて、学生たちがゼロから晩餐会を作る、ということをやりました。「晩餐会って何だろうね？」から始まり、食べるものもあるし、テーブルもある。音楽もあるし、お皿もあるし、案内状もあるし、学生はそういったことを考えていって、それらすべてを地域のもので作りなさい、というルールにしました。すると、地域に探しに行くんです。探しているうちに、例えば木材をどうするかというと、お風呂屋さんの薪として使う木材を見つけたのでこれを使えないかとか、建物どうしよう、ビニールハウスがあるじゃない、農家の人に借りよう、となる。食べ物はどうしよう、おいしいお豆腐屋さんがあったとか、畑を借りて地域のおじいちゃんから作り方を教わりやってみる、料理も自分たちで考えて作ってみる。招待状も出さなきゃいけないんだけど紙を買うわけにはいかないので、草を刈って漉いて紙にして。学生は皆、何かしらものづくりのできる人たちがかりなので、できるんです。テキストの学生は紙を漉いたりもしていますし、グラフィックが得意な学生は旗印になるプロジェクトのマークを作ったりします。マークというのは大切で、それだけでみんなの気持ちが盛り上がり、チームとしてまとまるきっかけができます。家具を作れる学生もいるし、マネジメントのできる学生もいる。それぞれの専門性や役割を活かし、地域の方々と関わりながら晩餐会を作っていました。最後にはお世話になった地域の方をゲストとして招いておもてなしをしました。

晩餐会を終えた後、展覧会と座談会を行いました。そこで印象に残っていることは、お招きしたデザイン評論家でプロデューサーの紫牟田伸子さんが「すごくみずばらしいですね。だけでもすごく豊かですよ」とおっしゃったんです。ひとつひとつのものがすべて地域の材料で手作りされたもので、パツと見は派手ではなくみずばらしい感じなんです。だけれども学生ひとりひとりが、この木材はとか、この料理はとか、これはそこのおじいちゃんとか、全部語れる。「その物語性の豊かさ」というのは本当に豊かですね。これからの豊かさというのはそういうところにあるのかもしれないね」といういただいたのが印象に残っています。そういう活動が今も続いています。来年度からの枠組みで「アートプロジェクト」をいただけたので、今度は、美術の学生や音楽の学生がもっと入ってくれる土台ができて、さらにオープンなかたちでできると期待しています。

早川：学生に絵本を作らせるというプロジェクトを何年か前からやっています。私が提案したわけではなく、2014年から「キャンパスをつなぐ、在校生と卒業生をつなぐ、教員と学生をつなぐ、教員と職員をつなぐ、地域と大学をつなぐ」をコンセプトにした「つなぐプロジェクト」が始まりましたが、その中で、心理学の木村美奈子先生と事務員の方で絵本を作って読み聞かせをするのがいいんじゃないかと始まりました。

絵本というのは、その時点で名芸にあった全部の学部の要素を含んでいます。絵は美術・デザインの学生が描き、絵本ができたなら、人間発達の学生がクリエイティブ園で読み聞かせをやる。子どものことが得意な学生ですから、どんな絵本が面白いのか、どんなふうにと読んだら伝わりやすいか、意見をアドバイスしてくれる。音楽の学生もいるので、読み聞かせの時に一緒に音楽を演奏することができる。実際にいろんな学部から有志でやってくれる学生を募って、クリエイティブ園などで発表しました。すごく面白かったです。皆それぞれ専門があって、それが協力してひとつの読み聞かせという活動になる。本当に楽しんでやれました。これは授業外のプロジェクトでしたが、来年度からは、アートプロジェクトという授業でできることとなります。横断科目なので全部の領域の学生が履修することができるようになります。「つなぐプロジェクト」では、学生たちが本当に頑張ってくれたのですが、何も単位にならないので、もったいないと感じていました。来年度からは、ちゃんと単位に含まれるわけですし、人間発達学部と芸術学部の4領域の学生が集まって、いい活動ができればと考えています。

今現在「教養講座(社会)」でも絵本制作をしているのですが、残念ながらちょっとバラバラにやっている感じがあるんです。どうしても、西キャンパス開講の時には美術とデザインの学生しか取りませんし、東キャンパスでは音楽と人間発達の学生しか取りません。時間割の組み方でそうなってしまっていることもありますが、せつかく読み聞かせを最後にやろうという授業なのに、結局片方の学生しかいません。来年度、もしもいい具合に時間割を組むことができ、全領域の学生が履修できるようになり、理想のかたちになるのではないかと考えています。

長江：サウンドメディアでは、デザインの津田佳紀先生と竹内創先生と以前からつながりがありました。「カレイドスコープ」というコンサートを毎年開催しています。学生が作曲した楽曲の作品発表コンサートなのですが、この8年ほどは、デザイン学部の学生とコラボレーションして、サウンドメディア

コースの学生が作曲した楽曲イメージに沿った映像制作をデザイン学部の学生が行い、当日プロジェクトするというを行なっています。音楽と映像が融合したアートですね(写真参照)。昨年からは、照明もエンターテインメントディレクションコースの学生に担当してもらっています。来年度からの新しい、サウンドメディア・コンポジションコースのカリキュラムでは、2年と3年次にマルチメディアアート(音と映像の融合)1、2が半期づつ入っています。これらのコラボレーションは今までも行なってきましたが、今後は、単位に含まれる授業として行うことができることとなりました。

松岡：若手じゃなくてスママセン(笑)。アートクリエイターコースも、飛騨との連携プロジェクトでミュージカルの舞台美術をこれまで4回程、やらせてもらっています。ミュージカルコースの森泉博行先生が書いた脚本に対し、依頼を受けて学生が制作します。ああいう取り組みは、学生にとっても非常にいい経験ですね。泊まり込みで高山へ行って、一緒になってリハーサルを見て、作っていきます。

興味を持つことで - こういった取り組みの背景には、どんなことがあるのでしょうか？

松岡：佐久島のことを始めたのが30歳ちょっとくらい前からですね。それからずっとやっていて、今では岡山の方だったり静岡の町で同じような取り組みを行っていますし、トリエンナーレもそれぞれそこそこの町でたくさん行われるようになりました。そういうことを含めて、そうしないとアートというものが受け入れてもらえなくなってきたのではないかと思います。ほかの領域と連携しながらやるのも、その流れと同じんじゃないかと思います。いろんな領域と連携して活動することで、受け入れてもらえるようになるのではないかと。美術でいえば、自分を表現するという意識が強すぎるのではないかと最近思うことがよくあります。今の時代、中学生でも自分の表現はできてしまいます。twitterだったり、YouTubeだったり、スペインの10歳の少年のパフォーマンスを朝のニュースで見ってしまったりする世の中です。自分が人の表現に興味を持つということが、変わってきました。奇抜な作品を作っただけでは誰も魅力を感じなくなってしまいました。個性が強いからといっても、その個性が見たいと思わなくなってしまいました。社会と係わるということをもっと積極的にアーティストやアートにたずさわる人間が考えていかなきゃいけないと思っています。





「専門的すぎてわかりにくくなっているんでしょうか？」

松岡：僕らが学んでいるのは西洋美術なんですよ。西洋から大事に重箱に入って届いてきたものを、まだ重箱に入れたまま大事にしていて、重箱から出してはいけないと思込んでいるように思います。美術では「俺はこの仕事なんだから、これを勉強してこういことをしなきゃいけない」そういった枠組みの中でやっていて、でもそれは一般の人から見るととても遠い話になってしまっている。いつまでもそこに美術があると信じている人は、ずっとそこを信じているんだけど、社会の人は、遙か遠いところに移動してしまっている。僕には、それが何かとても虚しく感じます。もちろん美術館で展覧会もしますし、グループ展にも参加しますが、本当に来る人が少ないんです。ギャラリーの人と話をしても「知り合いの誰それさんが来てくれたからいいんですよ」みたいな、仲間内だけで回っているような、卒業生が展覧会をやっても見に来るのは関係者ばかりで、普通のおじさんやおばさん、近所の人が見に来てくれるという来ない。それでいいと思ってしまうこと自体が問題だと思います。学生たちは、すごい技術を身に付けていくわけですよ。でも、それをどう使うかというところに間違いがあるとはいいませんが、大きなズレがあるのではないかと思います。それをもう少し気付けたいということが心にずっとあります。

水内：デザインも一緒ですね。

長江：「カレイドスコープ」を行なってきて、東キャンパスの学生は、西キャンパスの仲間ができたときに、彼らと自身の考えがとても違うことに毎回驚いています。デザインの学生でも、音楽に触れてみたいと言う部分は共通なのですが、お互いの専門分野になると考え方が異なるわけで、これは、私も学生時代、デザインの友人の発想にとっても驚いた記憶があり、是非とも学生に体験してもらいたいと思っています。卒業して実際の仕事となると、どちらかの分野がインシヤチブを取るかは内容によるので、その意見に沿っていくのが常ですが、毎年学生は、お互いの考えをぶつけあって作品を制作してっています。それらは学生ならではのかけがえない経験であると思います。

松岡：最近面白いことがあって、アートクリエイターコースの1年生の学生たちが7~8人くらいで、自主的にアニメーションを作っているんです。それで時々見ているんですが、音楽を音楽コー

スの学生にやってもらいたいんだといはじめて「じゃあ、僕が誰か先生に頼んでみるよ」と言っていたのですが、自分たちで東キャンパスに行き、声をかけてスカウトしていたんです(笑)。

早川：どうやって音楽学部の子だとわかったんだろう？授業に出てみて探したんでしょうかねえ？

松岡：たぶん東キャンパスへ来てその辺にいる学生を見て、良さそうな、何が良さそうなのかはわかりませんが、声をかけてみたらドンピシャで(笑)。音楽を自分たちのアニメーションに付けてもらうからといって、毎週会って曲を付けたり効果音を付けたり、というのをやってもらっているようです。勝手にやっているんですよ(笑)。

水内：そういうのは、ありますよね(笑)。

松岡：やっていますね。意外と学生たちはやっているんです。

長江：うん、うん。

松岡：僕らの方が構えちゃう。学生の方が意外とスルッといっている。

水内：学生にはだいたい先見性があるって、僕らが考えている以上に音楽も美術もデザインも一緒だというふうに考えているようです。学生同士でやりたいと思っているんです。でも枠組みがないので、気持ちだけで終わってたんす。これからはおそらく学生のモチベーションがどんどん違ってくるんじゃないかと思っています。

早川：日ごろから交流があるかどうか、すごく大事ですよ。普段何をやっているかわからなければ、どんなことができる子たちが向こう側のキャンパスにいるのか、わからないままです。それでは、そもそも頼もうという発想にはならないじゃないですか。それなりに授業を見たり一緒にサークルをやっていたりだとか、相手がどんなことをできるか知っていれば頼めることも増えていくのではないかと思います。普段からいろんな領域の授業を取れるのは絶対いいことだと思います。

水内：僕ら自身も楽しいですよ。先日、国際交流でデンバー大学ラモント音楽院のクリス・マロイ先生と田中範康先生の演奏会に行かせていただいたんですが、すごく楽しかったですよ。前衛的な電子音楽の演奏会で、僕は専門的な部分は全然わからないですけど、これはぜひデザインの学生たちにも行かせたいと思いました。

長江：うん、うん。

早川：私も、田中先生の作品を初めて聞かせていただいた時に、すごくびっくりしましたね。

水内：学生のためではあるのですが、僕らのためでもあるんじゃないかと思っています。すでに自分の専

門に凝り固まりはじめていて、僕ら自身も楽しいことを求めて近づいていくという姿勢は大事だし、学生から学ぶものもあると思います。楽しめない駄目という語弊がありますが、教員側が楽しんでいれば学生も楽しいだろうし、いい効果があると思います。

東は西へ、西は東へ 萩原先生は「バスが混雑するようになっただけじゃ駄目なんだよ」と心配していましたが、東と西がもっと近づかないといけない？

長江：来年、時間割がどうなるかは、これから決まるとは思いますが、ある分野のこの授業は東西どちらかのキャンパスに行かないと施設の関係、履修できないというようなことが出てくると思います。つまり、「その授業を履修したいので、わざわざそこに行く」や「視野を広げるためにあそこについて、他コースの学生と一緒に作品やコンサートを作る」といったことが自然に始まり、まさに、音楽・デザイン・美術の交流やコラボレーションがスタートすると思います。

早川：週に1度でもいいので、この曜日は西で過ごすんだとか、午前中はここへ行くんだみたいなようになれば、そのついでにほかの授業も取ってみようかなんていうことが起きるかも知れませんね。水内先生がおっしゃったように、大学でいろんなイベントがあり、私も水内先生のデザインフォーラムに行かせていただいたじゃないですか。違う先生がやられているイベントに実際に行ってみるとすごく面白いんですよ。教員もほかの先生がやっているいろいろなプログラムに参加してみたりコンサートを見に行ったりすれば楽しめるし、ほかの人のやられていることも理解しやすくなる。

社会に生かす **水内**：“専門性を持ちながら”というのが教員側にとって大きなキーワードになるのではないかと思います。専門性を持ちながらそれを開いていく。

長江：そうですね。
水内：専門性をどう開けるかということだと思います。隣でやっている美術やデザインに開いていくということもありますが、それを超えて社会にどうやって開いていくかということでもあります。

松岡先生がおっしゃったことはたぶんそうしたことだと思うし、僕が考えていることもそうだと思うんです。どう音楽をもって社会の中で生きていくんだということもまさにそうだと思います。これを、インターディシプリナリーで

学生たちは自然に領域を越える!?





はなくてトランスディシプリナリー（専門コミュニティの枠を超えたセクター横断的教育体制の下での「学び合い」。現実社会の諸課題に即応する実践的教育・人材養成。インターディシプリナリーは専門を持ち寄ること、トランスディシプリナリーはさらに相互に行き来して関係する）だと思えます。これまでは分野分野をつなぐということで終わっていたかもしれない。それをどうやって全く違う社会の中に開けるか、ということが領域が一緒になることで、できる気がします。

ひとつの分野だけではどうしてもその専門に凝り固まってしまう。音楽の人たちというのは電子音楽であんなことをやっているのかとか、そういう中で、デザインやアートの視点が交われれば、そこから社会へ広く開いていく可能性が見つかるかもしれないと考えられます。全く異なった分野に入っていく、その中に自分を生かす方法が見つかる、ということがBORDERLESS化した時に大事になるのではないのでしょうか。だからやっぱり専門を、ということだと思えます。片足で自分の地面を踏んでいるけど、もう一方の足でどこに行けるのかということを探っている、そういう状態が望ましいのかなと。

松岡: 大学を選ぶ時に高校生が「就職とか卒業後はどうなってますか」と聞いてきます。美術とデザインを見た時に、「デザイン」は仕事の名前だけ、「美術」は趣味の名前なんです(笑)。だから絵を描くことが好きで、本当に描ける子が、デザインを選ぶということがよくあります。音楽もそういうところがあると思うんですが、なかなか食えないという現実があります。そういう意味では、その中でどうやったらアートで食っていけるかということ、僕自身が実践をしながらひとつのサンプルとして、卒業生でもあるわけです、やっています。ただただ自分の好きなものを作っているだけじゃ駄目だということ、とにかく伝えたい。高い技術を一生懸命高めているだけの学生が本当に多いんです。どうやってその力を社会へ持っていくか。直接、絵を描くという仕事でなくても、そういう感性やセンスを生かせる仕事、たくさんあると思います。そういうことに気付いて欲しいなと思います。

長江: 音楽メディアの世界では、2005年にYouTubeができ、激変しています。CDが売れなくなって厳しい時代になったともいえます。実際に学生に聞いてみるとほとんどCDを買っていない学生もいます。でも、それは悪気があってというわけではなく、もはやとても普通にYouTubeで音楽を聴いています。このようなこともあり、音楽の世界では、メディアを売ってというビジネスから、ライブコ

ンサートビジネスにシフトしてきています。以前ならば、ポップ、ロック分野は、毎年CDを出してそれを買ってもらう、コンサートツアーをしてという活動スタイルであったのが、現在では、YouTubeやSNSで広報して新譜を知ってもらい、興味を持ったらコンサート会場に足を運んでもらう。そして、その場でリアルタイムに音楽を体感するというのを多くの人々は求めているようです。また、コンサート会場でのタオルやTシャツなどのグッズ販売も収益上、とても重要な要素になっています。これらのコンサートでは、音のみの表現ではなく、映像や照明との演出が当たり前となり、今後、これらの結びつきを学び研究することはとても大切なことであると思います。

音楽は、私たちの生活を豊かにするととても大切なものです。インターネットが発達しメディアを通して世界中の音楽を聴くことができるようになり、音楽ファンにとっては音楽の選択肢がとても増えたと思います。そして、人々が音楽のどのような部分にお金を払って体験したいかということについては、メディアを通してのみではなく、音楽のもっとも原始的な行為である「その場で演奏家が演奏し、その場で音楽を聴く」ということに帰帰してきていると思います。今、エンターテインメントディレクションコースに入学する学生の多くは、これらのコンサートに感銘を受け、卒業後は、舞台全般や企画制作、音響、照明のプロとして活動することを視野に入れて勉強に励んでいます。私自身もそうでしたが、10代の頃は、音楽を聴くことについて自身の趣味嗜好でそれらをチョイスしています。ただ、これが仕事になるとそうは行きません。音楽分野に進みたいというきっかけは十人十色ですが、特に、音楽制作やエンターテインメントの分野を大学で学ぶということは、さまざまな音楽分野の歴史や背景、音楽理論、それぞれの音楽の美学を知ることがとても重要であると思います。知らない分野があるということは、将来の仕事の幅を自ずと狭めていることになります。また、音のみではなく、映像や照明との表現や英語の習得もとても大切なことであると思います。

そもそも音楽分野で身を立てていくことは、日本だけではなく世界的に見ても、とても難しいことですが、大学で音楽を学ぶということは、大学側は、最終的にどのように「音楽人として身を立てていくか」ということを、教える必要があると思います。そういう意味では、たとえば、演奏分野は、演奏技術以外の部分も、教えていくということを視野に入れる必要があると思います。また、これからは、演奏者が、自分自身をどのように世の中にプレゼ

ンテーションして仕事に繋げていくかについても知らないといけな時代になってきていると思います。演奏者自身でコンサートを企画し、それらをどうプロモーションするかも大切な要素となると思います。例えば、自身の演奏を録音や録画して、YouTubeやSNSを使用して広報をすることも、もはや自身で行なうことが必要であると思います。

早川: みなさんの話を聞くと、リベラルアーツコースは、また方向性が違うなと思います。芸術教養はもともとが他の3領域と違って、ジェネラリストを作るという感じですか。何かが専門というわけではないんです。就職も、一般企業や行政などに進んでもらえればいいのかと思っています。その時に芸大にこのコースがある意義は、大学の時に芸術の学生と一緒に勉強してきた、そういう世界をかじってきたという経験を、社会の中で生かすことです。プロジェクトを依頼する行政側で、アートのことがわかる、話の通じる人材を育てなきゃいけないと思っているんです。

リベラルアーツは、スペシャリストの人たちがやっていることを理解しているジェネラリストを育てる領域です。専門家の人たちがやっていることを社会に生かせるような人材を育て、他の領域とこのコースが協力してやっていけばいいなと思っています。

どんな仕事をしててもデザインの側面やアートの側面、それから音は、必ず絡んできます。例えば会社だったら広報、どんなwebページを作るか、ポスターを作るか、そういうのはやはり専門家をお願いして作ってもらおうと思いますが、そういうことを全く知らない人たちが注文するのは話も通じないし困ります。アートも含めた教養を身に付けた人が世の中にもっと増えれば、逆に芸大への需要も増えてくるのではないかと思います。リベラルアーツの人が、世の中に美術の需要を作り出す可能性を秘めていると思うんです。このサイクルが上手く回ればいいなと思っています。

思いきりやろう! **水内:** 名古屋芸大の特徴なんですか、すごく自由な雰囲気があります。僕にプロジェクトができたのは、この学校に来て2年目ですよ。「別に失敗してもいいよ、好きな先生を呼んでやりなよ」とっていただきました。学生たちの雰囲気もすごく自由で、自分たちでやろうみたいな雰囲気があります。それがすごく大事だと思うんですよ。そういう名芸の良さは、これからも大事じゃないかと思います。
一同: うん、うん(大きくうなづく)。



Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism



2016.07.31
Nagoya Groovin'
Summer2016
@オアシス21



2016.08.11
TONNBASA Live
@みよし
Car-Den Hall



2015.07.19
Big Tree Live
@奈良 OceanBlvd



Orquesta Yambe
de Nagoya Live
@群馬 Freskito's



Vol.77 NUA-OB 荒川“B”琢哉

(あらかわ “B” たくや)
パーカッションニスト



コンガ、ティンパレス、ジャンベ、カホン、バスター……、パーカッションニストには数多くの楽器が必要。楽器は自分で運搬する



1989年 愛知県生まれ
2007年 音楽学部 音楽文化創造学科 サウンドメディアコース入学
2009年 ジャズポップスコースへ転科
2011年 音楽学部 音楽文化創造学科 ジャズポップスコース卒業

音楽理論を野々田万照氏に師事、演奏技術をカルロス菅野氏、美座良彦氏、ルベンフィゴア氏に師事。

安定したビートとパワフルなプレイ、演奏を心から楽しむというスタイルで、共演者からの信頼も厚い。

アーティストのサポート「高橋真梨子 with ヘンリーバンド」や「Nagoya Groovin' Summer」[YANSA21(高山市)]など様々なイベントへの参加、中高生のコンサートでのゲスト演奏等ミュージシャンとのセッション、「野々田万照&ゴージャス☆モンキーズ」などへの参加、ラテン音楽を少しでも身近なものにしたいという想いで立ち上げた自身のラテンバンド「B-Style」「B-Style Big Band」等、ジャンルを問わず活動中。



手も楽器の一部。叩く指の本数や楽器のさまざまな場所をたたくことで音圧を変えたり、色々な音を出す。手で叩くというシンプルな奏法でさまざまな音色を作り出せることがパーカッションの魅力

死んでもいいから好きなことをやりたい

「大学を卒業した時点で、まず絶望しました。スケジュール帳が4月から真っ白なんですよ! (笑)」
豪快に笑う姿、愛嬌ある風体と人好きする口調、冗談めいた言い方だったがフリーランスになって生きていくことの厳しさを感じさせた。アマチュア時代とプロになって感じる違いを聞いてみたところ、最初に出たのが冒頭の言葉だ。「アマチュア時代は、大学のコンサートがあって、その前にリハーサルがあって、スケジュールが埋まっていたんです。それが4月からは真っ白。要は、学校の仲間としか音楽のことをやっていなかったってことです。そこで、『俺、やっぱり勘違いしていたかもしれない』と気付かされました」プロとして活動するならば、自分の仲間内だけの狭い範囲で音楽をやっているのでは駄目だと感じ、自分を知ってもらおう努力を始めた。「色々なライブハウスのセッションに顔を出したり、大学の先生を頼って一緒にバンドで出たりを続けました。そういうことをしていくうちにライブハウスのオーナーさんやお客さんが僕のことを知ってくれるようになり、関係がどんどん広がりました。それでも、パーカッションの仕事だけで成り立つようになったのは、3、4年経ってからじゃないかと思います」

幼い頃からピアノを習い、金管バンドのあった小学生時代はトロンボーンを吹いていた。打楽器との出会いは中学生になってからだという。進学した中学にジャズ・オーケストラ部があり入部、トロンボーンを希望した。ところが顧問の考えで、ドラムに任命される。初心者ばかりのジャズバンドで、少しでも素養のある者をリズムセクションに振り分けるとするのは非常に合理的な考えだと分かるものの、任される生徒は大変である。「最初は、手足がそんなに動くわけじゃなし、バラバラじゃないですか。何で俺がこれをやっているんだろうと思っていましたが、少しずつできるようになっていくと



2016.12.1 師匠、野々田万照特別客員教授の公開講座に出演。ボケとツッコミの掛け合いも息ぴったり



楽しいんです。すぐに楽しくなりました」高校になると、東海地区の高校生ビッグバンドFree Hills Jazz Orchestraに参加すると同時に、学校の部活でも吹奏楽部に入った。Free Hills Jazz Orchestraではラテンパーカッションを始め、部活ではトロンボーンとユーフォニアムを担当と、音楽漬けの高校生活を送る。「学校の吹奏楽部は強くなかったので部員が足りなくて、コンクールのときは、一曲はユーフォニアム、別の曲ではパーカッション、みたいな感じで掛け持ちでした。3年になると、スコアを読むことが好きだったので、指揮をしていました」生徒会活動もやっていたというから人を惹きつけるものがこの頃からあったのだろう。

大学は、演奏家を目指して……、となりそうだがそうはならず、本学のサウンドメディアコースへ入学する。「両親の要望でした。手に職の付くところに行けということでした。レコーディングとPAを学んでいましたね。安定した職業に就かなきゃいけないと考えていました」しかしながら、本学のカリキュラムを利用してサウンドメディアコースで学びつつ、パーカッションも続けていた。予想外だったのは、パーカッションニストの数が少なかったこと。野々田万照氏の授業を受け、セッションをしてい

るうち、色々な場所から一緒にやろうと声がかかるようになった。演奏者の絶対数が足りなかったのだ。サウンドメディアコースにいながら、たくさんの演奏会に出演するという状態になっていった。数多く演奏会をこなすうち、考えも徐々に変わっていった。「3年生になると『やっぱり、俺、演奏をやりたいな。演奏で喰っていききたい』という気持ちになっちゃったんです。なんというか根拠のない自信みたいなものもあって、死んでもいいから好きなことをやりたい、という気持ちになってしまったんです」

両親は大反対だったが、3年からジャズポップスコースへ転科。演奏を突き詰めるだけでなく、プロになることを念頭に練習とライブに励んだ。「サウンドメディアの長江先生は、僕がパーカッションをやりたいがっているという気持ちに気付いて『やりたいのならやったほうがいいよ』と言ってくれました。長江先生と野々田万照師匠には本当に感謝です」

反対していた両親だったが、活動を続けるうちライブを見に来てくれるようになったという。「30歳までに芽が出なかつたら辞めなさいといわれていました。そういういつプロになることを認めてくれたのかなと勝手に解釈しています。ライブに来てくれるのは、認めてくれたのか、あきらめたのか、どっちかですね(笑)」

プロとしてやっていくためには、どんなことが必要かと尋ねると、しばらく考え込んだすえ「多少は喰えなくてもしょうがないという覚悟が必要。簡単には喰えない、それでも、あきらめない、そして好きでありつづけることです。中途半端にプロを目指すっていうのは絶対に不可能! それからお客さんの前に立つ以上、そのときの最大限を必ず出せるようにしておくこと」曲を支えるリズムを作り、彩りを加えるパーカッション。演奏するプレイヤーは、プレイも人柄もホットなのだ。

News & Topics

音楽学部

ジャズ・ポップスコース公開講座 菊田俊介氏による 「ブルースと ファンク・ロック音楽の世界」を 開催しました

2016年10月27日(木)、本学東キャンパス2号館の大アンサンブル室にて、ブルース・ギタリストの菊田俊介氏をお招きして、公開講座「ブルースとファンク・ロック音楽の世界」を開催しました。

ジャズ・ポップスコースの上田浩司教授から紹介され、ギターを手にした菊田氏が登場し、上田教授と2人でギターセッションが始まりました。息のあった演奏は、とてもギター2本だけでは思えないほどの迫力でした。2曲目は、ケニー・ドーハムの名曲「ブルー・ボッサ」。オリジナルのホーンをギターに置きかえ、ブルースアレンジとして演奏されました。

演奏を終えてからは、事前に学生から寄せられた質問に答えていくという形で講座は進められました。「人生で大切にしていることは？」という問いに対し、「B.B.キングとの出会い。黒人たちが演奏している世界に入っていったときに、ブルースが本当に好きなこと、ブルースへの尊敬の念を持っ



- 1 上田浩司教授とのセッション。息の合った演奏で会場を魅了
- 2 リラックスした雰囲気の中、ブルースへの愛情、自分の音楽のルーツについてなど、重要なことが語られました
- 3 学生とのセッション、「The Sky Is Crying」
- 4 「Sweet Home Chicago」学生たちとのセッションを楽しんでいるよう

ていたことで、一緒に仲間に加えてくれた。「愛情と理解」これは、すべての音楽に通じるものだと思う」と答えました。また、自分の音楽のルーツを持つことが、もっとも大事なことと話しました。

最後は、ジャズ・ポップスコースの学生とのセッションで「The Sky Is Crying」、「Sweet Home Chicago」を演奏。「Sweet Home

Chicago」では菊田氏がボーカルも担当、ブルージーな喉を聞かせてくれました。演奏後は、学生一人ひとりを称え、技術や練習法を指導し、講座は終了しました。終了後も、学生たちは菊田氏にそれぞれ質問したり、使用している機材などを確認していました。

当日の様子は、本学ウェブサイトもあわせてご覧ください。

音楽学部

デンバー大学ラモント音楽院・ 名古屋芸術大学音楽学部 交流演奏会を開催しました

2016年11月10日(木)、本学東キャンパス2号館の大アンサンブル室において、姉妹校であるデンバー大学ラモント音楽院作曲科教授クリス・マロイ氏を迎えての交流演奏会を開催しました。

この演奏会は、本学国際交流センターの主催によるもので、マロイ氏と本学教授田中範康の作品を本学講師たちが演奏するものです。

ステージ中央にはピアノがセットされていますが、ピアノを取り囲むようにPAセットが配置され、客席の最前列にもキーボードやコンピュータ、背後にはスクリーン

がセットされています。これらは、通常のコンサートのように楽器の音を増幅するためではなく、効果としての装置であることなど、現代のエレクトロニクスを利用した音楽であることが紹介されました。

そして、マロイ氏が登場し、1曲目の「ピアノ、エレクトロニクスのための冷光」が演奏されました。ピアノを弾きながら、傍らにあるコンピュータを駆使しての演奏です。2曲目は、田中氏の作品「モノローグピアノ曲集より第1番」を、本学教授山田敏裕が演奏。3曲目は、再びマロイ氏の作品ですが、映像に音楽を乗せた作品で、音楽表現の幅の広さを感じさせるものでした。

第2部の始めには、マロイ氏が挨拶に立ち、ジョークを交えた楽



- 1 クリス・マロイ氏による演奏。ピアノと傍らにあるコンピュータを操作
- 2 「モノローグピアノ曲集より第1番」ピアノ 山田敏裕氏
- 3 「ピアノのための小さな光」ピアノ 戸田恵氏(本学大学院修了)
- 4 「蛙、魚、籠」ピアノ、ソプラノ、バスクラリネットのアンサンブル。クラリネットを吹かずにキイだけの音を出したり、ピアノの弦を直接手で弾く演奏も

しいトークとなりました。多くの観客に聞いてもらえて感謝していること、プレイヤーの技術の高さ、ことに難曲をマスターするよう練習していただいたクラリネットの本学教授竹内雅一、PAセットを準備していただいた本学准教授長江和哉に謝辞を述べました。最後の曲は田中氏の「ソプラノ、バスクラリネット、エレクトロニクス

のためのSparkling in the Space IV」で、森川栄子氏のソプラノ、青山映道氏(本学非常勤講師)のバスクラリネットに、田中氏のエレクトロニクスが加わるアンサンブルで、iPhoneや効果音としてのキーボードを用いるなど、非常に興味深いものでした。

当日の様子は、本学ウェブサイトもあわせてご覧ください。

音楽学部

音楽学部主催 室内楽の夕べ 2016が 行われました

2016年12月6日(火)、本学東キャンパスの3号館ホールで、音楽学部主催の室内楽の夕べ2016(大編成の部)が開演されました。

この演奏会は、今年度の室内楽の授業で取り上げた作品を発表するもので、大学でどんな授業が行われ作品が仕上がっているかを来場者の皆様にご覧いただける貴重な「場」であり、学生が1年間かけて一生懸命取り組んだ成果を披露する機会となっています。11月に行われた小編成の部に続く演奏会として行われました。

開演に先立ち、音楽学部演奏学

科弦管打コース長の依田嘉明が挨拶を行い、本日の演奏会の趣旨などについて話しをしました。また、プログラムの司会・進行も担当しました。

プログラムは、パーカッションアンサンブルの演奏で始まり、水野修孝の「鼓-指揮者と8人の打楽器奏者のための」が演奏されました。8名の学生が舞台を縦横に走り回りながらの演奏で、とても迫力のある演奏でした。

続いて、弦楽合奏団の演奏で、「B.プリテン作曲のシンプルシンフォニー」が演奏されました。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスによる合奏で、演奏の途中、楽器を弓ではなく指で弾くパートがあり、低音で柔らかく穏やかな感じの音色が醸し出され



- 1 弦楽合奏団の演奏
- 2 クラリネットオーケストラの演奏
- 3 プラスアンサンブルの演奏
- 4 サクソフォンオーケストラの演奏
- 5 開演の挨拶をする演奏学科弦管打コース長の依田嘉明氏
- 6 フルーツオーケストラの演奏

ていました。

この2つのプログラムは、演奏終了後に依田コース長が学生の代表者に質問をして、学生がこれに

答えるという形で進行しました。

次は、クラリネットオーケストラの演奏で、本学教授の竹内雅一が指揮を執りました。

このプログラム以降は、演奏前に指揮者（本学教員）が曲の解説をしたり、楽器の種類を来場者に紹介するなどが行われました。曲目は、E.グリーグの組曲「ホルベアの時代より」前奏曲を含めて5曲が演奏されました。

後半は、本学教授の星 順治が指揮するプラスアンサンプルで、「G.ラングフォード作曲：ロンドンの情景より」と、「J.スウェーリンゲン作曲：栄光のすべてに」の2曲が演奏されました。続いて、サクソフォーンオーケ

ストラ（真島俊夫作曲：ラ・セーヌ～サクソフォーン8重奏のために～）の演奏が行われました。学生7名に本学教員の三日月孝（1st.Sop.Sax）が加わっての演奏でした。最後は、本学教授、高木直喜の

指揮するフルートオーケストラで、フィガロの結婚（W・Aモーツァルト）、エレガンス（R.ローデン）、マリシティ（廣瀬量平）が演奏され、終演となりました。ホールを埋めた客席からは、盛大な拍手が送られていました。

音楽学部

**名古屋芸術大学オーケストラ
第34回定期演奏会を
開催しました**

2016年11月25日(金)、愛知県芸術劇場コンサートホールにて、名古屋芸術大学オーケストラの第34回定期演奏会を開催しました。名古屋芸術大学オーケストラは、1983年に第1回定期演奏会を開催して以来、音楽学部学生の日頃の研鑽と成果を披露する実践の場として、演奏会を年に1度開催しています。指揮は、古谷誠一客員教授、クラリネットは本学教授の竹内雅一によるものです。1曲目は「クラリネット小協奏曲 ハ短調 op.26」。1811年に作ら

れた曲ですが、クラリネットが現代の形に発達するさなかに作られたもので、可能になった新しい奏法が取り入れられた曲です。3部構成の曲ですが、穏やかに始まり、徐々に技巧的な奏法が増えていく構成です。クラリネットのソロとオーケストラが掛け合いするような部分では、観客もすっかり音に酔いしれているようでした。演奏が終わると、竹内教授に盛大な拍手が送られていました。2曲目は、ブルックナーの「交響曲第5番 変ロ長調」です。この作品は、ブルックナー中期の傑作と言われるもので、重厚で荘厳な曲調を持ち、ブルックナーではこの作品が一番好きというクラシックファンの多い作品です。第1楽



1 会場は愛知県芸術劇場コンサートホール。クラシック演奏会に合わせて設計された響きの豊かなホール
2 ウェーバー「クラリネット小協奏曲 ハ短調 op.26」、クラリネット 竹内雅一教授
3 ブルックナー「交響曲第5番 変ロ長調」
4 指揮は、古谷誠一客員教授。会場は演奏に魅せられているようでした

章の荘重な出だしから、演奏者にも会場にもピンと張り詰めた緊張感と集中力が漂います。一瞬の無音部分や、管楽器の一斉のプレス音が生々しく、ホールの音の良さやオーケストラの練習の成果が聞き取れるように感じました。第2楽章は、弦楽器のピチカートの響きが心地よく、ゆったりとした音

が広がります。第3楽章では、ピチカートが激しくなり迫力を増し、大きなスケールのフィナーレの第4楽章へとつながっていきます。演奏終了後拍手は鳴り止まず、指揮の古谷教授は何度も舞台上に立ち、拍手に応えていました。当日の様子は、本学ウェブサイトもあわせてご覧ください。

美術学部

デザイン学部

**瀧田家アートプロジェクト
トキラムスプーが
開催されました**

2016年10月23日(日)から11月6日(日)まで、愛知県常滑市の市指定有形文化財「廻船問屋瀧田家」で、本学美術学部アートクリエイターコース陶芸・ガラスクラスの学生、研究生、卒業生による展覧会「瀧田家アートプロジェクトトキラムスプー」が開催されました。この展覧会は陶芸とガラス、それぞれの制作に取り組む学生たちが、常滑という地で空間をテーマとして、人々の暮らしと共にあるヤキモノと、古くからそこに根づくモノづくりの精神、産地ならではの空気を感じ、主観と客観を織り交ぜた空間意識に富んだ展示に挑戦したものです。展覧会の会場である「廻船問屋

瀧田家」は、日本航空の重役を務めた瀧田あゆち氏の生家で、常滑市の指定有形文化財です。作品は、主屋一階の座敷および二階に、また、離れの玄関前の庭と座敷、そして、主屋地下の石積み部屋にも展示されていました。瀧田家が位置する周辺は、常滑やきもの散歩道のほぼ中央で、多くの窯屋が点在する風景と土蔵造りの商家が佇んでいます。期間中は、マップを片手に工房やギャラリーを訪ねる二人づれや、

外国からの団体の旅行客など大勢の人たちが会場を訪れていました。

出品者・作品名は以下の表をご覧ください。



氏名	所属	作品名	氏名	所属	作品名
大森 邑佳	アートクリエイターコース 陶芸クラス3年	呼子	松井 淳菜	アートクリエイターコース ガラスクラス4年	湧きだす思い
清水 理沙子	アートクリエイターコース 陶芸クラス3年	変易	安江 晴香	アートクリエイターコース ガラスクラス4年	秋
山田 将太	アートクリエイターコース 陶芸クラス3年	陽月・オスマン織部	植村 宏木	アートクリエイターコース ガラスクラス研究生	光輪
塚本 友太	アートクリエイターコース 陶芸クラス4年	変わりゆく者	浅井 和真	工芸領域陶芸コース2014年度卒業 (現 アートクリエイターコース陶芸クラス)	飛べない扇
伴 和憲	アートクリエイターコース 陶芸クラス4年	RINNE	宇佐美 容子	工芸領域陶芸コース2015年度卒業 (現 アートクリエイターコース陶芸クラス)	団栗
市平 美穂香	アートクリエイターコース ガラスクラス3年	ガラス刀	大西 佑一	工芸領域陶芸コース2015年度卒業 (現 アートクリエイターコース陶芸クラス)	遙か一盤一
大河内 愛美	アートクリエイターコース ガラスクラス4年	内包世界	酒井 智也	工芸領域陶芸コース2014年度卒業 (現 アートクリエイターコース陶芸クラス)	始まりの形態
深川 瑞恵	アートクリエイターコース ガラスクラス4年	湧き記憶			

美術学部

デザイン学部

**テキスタイルデザインコース
尾州毛織物プロジェクト2016
特別客員教授 宮浦晋哉氏による
デザインチェックが行われました**

2016年10月11日(火)、本学西キャンパスのテキスタイル工房で、産学連携「尾州毛織物プロジェクト

2016」の一環で制作する毛織物のデザイン選考を行いました。テキスタイルデザインコースの3年生が受講するデザイン実技の講座で、地元尾州毛織物産業について理解を深め、学生がデザインした生地を実際に織物工房の織機を使って制作するというものです。できあがった生地は、特別客員教授の宮

浦晋哉氏と斎藤統氏（山本耀司氏のパリ拠点Yohji Europe社社長、Issey Miyake Europe社社長など歴任）の対談でも見ていただき、宮浦晋哉氏が運営するセコリ荘で開かれるアパレル業者向けの展示会でも披露されることとなります。学生たちは、これまでの授業で、一宮市にある(有)カナレのシヨ

ンヘル織機（生産効率は低いものの、手織りの風合いを残した仕上がりが特徴）を見学、サンプルを制作してきました。今回の授業では、デザインのアイデアと試作したサンプルを、宮浦氏と(有)カナレの足立聖氏に見ていただき、織機を使って生産するデザインを選ぶことを行いました。

今回のプレゼンテーションでは、宮浦氏は、具体的な生地の使い方を想定した上で市場性があるかを判断し、デザインの可能性を探ります。足立氏は、織機で織った場合に不都合はないか、織り方を変えることでより目的に適うものができるのではないかと、技術面を確認しました。

選考により、学生それぞれ1点ずつの作品が選ばれて12月の展示会に向けて織機によるサンプル制作が行われることになりました。

選考を終えて宮浦氏は「コンセプトに学生それぞれの個性が出ているし、それに基づいてしっかりとオリジナリティのあるものできています。ポテンシャルがあり、面白くなりそう。既存のテキスタイルデザイナーにとっても刺激になるのではないかと感想を述べました。制作に協力していただく足立氏は、「機械で織った場合、手で織ったサンプルと全く同じようにはなりません。機械と人間では違ってきますが、その違いを感

じて欲しいです。自分が思っていたものと変わっていくところを検証してみてください」と話しまし

た。選考の様子は、本学ウェブサイトもあわせてご覧ください。



- 1 順番にプレゼンテーションする学生たち
- 2 デザインソースの写真とコンセプト、手織り機で制作したサンプルを確認
- 3 プレゼンテーションを聞く宮浦氏と(有)カナーレの足立聖氏
- 4 織り方や素材の選定についてなど、技術的な面もしっかりと検討

美術学部 デザイン学部

シャチハタ株式会社
×名古屋芸術大学
産学連携ワークショップ
学生のアイデア提案が
商品化されました

本学デザイン学部ヴィジュアルデザインコースは、2010年度より、シャチハタ株式会社（代表取締役社長 舟橋正剛 本社：愛知県名古屋）と産学連携ワークショップとして、既成の概念にとられないスタンプの使用法や印面デザインの制作に取り組んできました。このワークショップの成果として、本学学生のアイデア提案が基となりシャチハタ株式会社から商品化され、2016年11月28日に発売されました。新しく発売された

スタンプは、「手洗い練習スタンプ おててボン」という商品名で、お子様の手洗いをスタンプで楽しくサポートするものです。

この商品のアイデアを提案したのは、本学ヴィジュアルデザインコース卒業生の伊藤友美さん（2014年度卒）で、現在は、プリ・テック株式会社の事業開発センターのプランナーとして活躍され



ています。新商品の発売に先立ち、昨年11月2日、シャチハタ株式会社本



社で感謝状贈呈式が行われ、舟橋社長より伊藤友美さんに感謝状と記念品が贈られました。



「手洗い練習スタンプ おててボン」(シャチハタ株式会社 NEWS RELEASE より)

外遊びから帰ったお子さまの手には、目に見えないばい菌が多数存在しています。ノロウイルスやインフルエンザなどの感染症や食中毒を予防するためには、石けんを使った丁寧な手洗いが効果的です。しかし、消費者庁の「消費者の手洗いに関する実態調査」によると、実際には手洗いにかける時間が15秒以下と、簡易的な手洗いで済ませている方が7割以上を占めています。この度発売いたします「手洗い練習スタンプ

おててボン」は、お子さまの手のひらにボンと「ばい菌」のイラストをスタンプし、印影がキレイに消えるまで石けんを使用してしっかり手洗いをすることで、上手な手洗いの練習ができる。新しい手洗い練習ツールです。「ばい菌」の印影を洗い落とす過程が視覚的に確認できるので、お子さまが楽しみながら手洗いの練習をすることができます。インキ色はブルーとピンクの2色で、安全性に配慮した食用色素を使用しています。

美術学部 デザイン学部

絵本作家 三浦太郎展
こどもアイデンティティー
～「Je suis…」から
「ぞうちん」までが
開催されました

2016年10月21日(金)より11月2日(水)まで、本学西キャンパスのアート&デザインセンターギャラリーで、絵本作家 三浦太郎展、こどもアイデンティティー～「Je suis…」から「ぞうちん」までが開催されました。

三浦太郎氏は愛知県西尾市に生まれ、大学卒業後はイラストレーターとして活躍し、2001年のボローニャ国際絵本原画展の入選をきっかけに、絵本作家としてデビューしました。国内では、『くつついた』を始め、『まかせとけ』などはたらくるまシリーズから最新作『おやすみぞうちん』のぞうちんシリーズなど、数々の人気の絵本作品を手がけています。一方で、海外の出版社からは、『TON』、『TOOLS』、『WORKMAN STENCIL』など、グラフィカルで



美しい作品も出版してきました。この展覧会では、三浦氏の国内外で出版された絵本の原画150点

と共に、新作「こどもアイデンティティー」が展示されました。2004年から現在まで出版され

Column NUA No.35

大学の生き残り策 ー全国調査からー

人間発達学部教養部会 教授 赤井朱美

本稿執筆のご依頼を頂いた時、私はちょうど、学会の自治体調査旅行の最中だった。私は、法律畑の出身だが、各地方自治体における法政策の提言が専門である。平たくいうと、地域における「まちづくり」「地域振興」「活性化」のための法政策を、法の趣旨と国の主導する方向に照らして、国や自治体に向けて提言することで

ある。

少子高齢化のなか、若者は都市を志向し、地元には高齢者のみがとどまり過疎化する一方という状況を打開するべく、各自治体は「地方活性化」のアイデアで、しのぎを削っている。

今回は、他大学の研究者の先生方とともに四国、中国地方及び岐阜県の調査に回ってきた。徳島県では県内全域にITを導入し、首都圏から企業を誘致する「サテライトオフィス」事業が大成功した。加えて、料理のつまに添えたり、結婚式等パーティに華を添える「葉もの産業」をも立ち上げ、これも地方活性化の施策と

して、各自治体が競って徳島県を視察に訪れている。畑作物とは違い「葉もの」は軽い。高齢女性が座ったままでも束ね、製作・梱包まで携わることができる。

今回の学会調査で、大変、印象的だったのは、「地方の私立大学の公立大学法人化事業」であった。自治体と大学は共通の問題を抱えている。

大学は、少子化の近年、「冬の時代」と言われ、学生の確保に躍起となっている。文部科学省によると、私立大学の43%は定員割れである。構成員を確保できない器は、自治体であれ、大学であれ存続できない。

私立大学と自治体が手を組めば若者を誘致でき、地

た絵本の原画や当時の制作資料などを通して、制作スタイルの違いなど、様々な方法論を見比べることができました。そして、新作

「こどもアイデンティティ」は、5歳から8歳の子どもたちを対象に、目、鼻、口といったあらかじめ用意した各々のパーツをそれぞれの

顔によって組み合わせて作られる、いわば子どもの肖像画となる作品です。作家の豊かな想像力と、子どもたちに向けられた暖かい眼差

しが見て取れました。(展覧会あいさつ文より抜粋)

期間中は大勢のギャラリーが訪れ、熱心に鑑賞していました。

美術学部 **デザイン学部**
官学連携活動
北名古屋市×名古屋芸術大学
北名古屋市市制施行
10周年記念事業
原付バイクナンバープレートの
完成披露が行われました

2016年11月15日(火)、北名古屋市西庁舎の3階会議室において、北名古屋市が市制施行10周年記念事業の一環として実施してきた原付バイクナンバープレートの完成披露が行われました。

この原付バイクナンバープレートの制作は、官学連携活動として、

本学と北名古屋市が昨年5月から取り組んできたもので、数多くのデザインの中から、7月の最終審査でグランプリを受賞した作品が製品化されたものです。

デザインを制作したのは、本学デザイン学部ヴィジュアルデザインコースの3年、土松由依(どまつゆい)さん、保利みちる(ほりみちる)さん、馬眺娜(まきょうな)さんで、完成披露に出席した3名は、ナンバープレートの見本を手に持って、にこやかな表情で取材に応じていました。

北名古屋市からは、財務部税務課 主幹の加藤友英氏の他、数名

の職員の出席のもと、中日新聞社、NHK、北名古屋市タイムズなどマスコミ各社が参加した完成披露となりました。

この原付バイクナンバープレートは、平成28年12月1日から、北名古屋市役所税務課窓口(東西庁舎)で交付されます。



1 デザイン制作した本学の3名の学生
2 完成した原付バイクナンバープレートの見本
3 完成披露で挨拶をする財務部税務課 主幹の加藤友英氏
4 取材に応じる学生たち

名古屋芸大グループ校特集
名古屋芸術大学附属
クリエ幼稚園

「保護者も参加して
つくる幼稚園」

クリエ幼稚園では、「サポーターズ」として、園生活や行事を主体的につくっていく担い手として保護者参加を進めています。

昨年度までに

- おおかさんサポーターズ
- プール遊びサポーターズ
- 読み聞かせサポーターズ
- おじいちゃん、おとうさんサポーターズ
- おさんぽ安全サポーターズ

が組織されました。

参加された保護者の方からは、「普段の様子がわかった」「自分の子どもが家での様子と違い、みんなと一緒に過ごしている姿が見られた」「子どもが話している友達の顔を見ることができた」などの感想が聞かれました。

今年度はさらに、「草取りサポーターズ」を募集しました。都

合のつく方が、都合のよい時間に、子どもにとってよりよい環境をつくろうと大勢参加してくださいました。お家の方の姿を見て、一緒に肩を並べて草取りしたり、ゴミ袋を担いだりする子どもたちの意欲的な姿も見ることができました。

未就園児の「ひよこ組サポーターズ」では、子育ての先輩ママとして、その場においてくださることで安心感があったと思います。さらに運動会では、競技中の補助をお願いしました。参加募集をしたところ大勢の方の希望があり、子どもたちが頑張っている姿を見るだけでなく、実際に園と一緒に行事を進行していただきました。

「図書サポーターズ」の誕生で、子どもたちへの絵本の貸し出しが始まりました。子どもたちが絵本に興味を持ってお話の世界を楽しみ、科学の世界への探究心を持ち、家に持ち帰ることで園と家庭を繋ぐ大事な時間として関わってもらっています。また、絵本の分類別の整理や補修、棚の修理をはじめ、図書コーナーの装飾や壁面飾

りなども自主的に行っています。

園からの募集だけでなく、保護者の方からの提案で、「園長先生とおしゃべり会」が2回開催され、子育ての悩みや身近な困りごとなどをざっくばらんな雰囲気の中で話し合いとなり、有意義な時間が持てたようです。

今後は、子どもたちの「作品展」に保護者の作品も展示し、「もちつき会」でもお手伝いをお願いすることにしています。

このように、「サポーターズ」を始めたことで、保護者の方には我が子も園にいる全ての子どもと一緒に、園と共に楽しんで子ども

を「育てる」という意識を高めていただけていると思っています。また、子どもたちは自分の親だけではなく、いろいろな大人と関わる楽しみが持てるようになったと思います。

園と保護者が、よりよい繋がりを持つことは、子どもたちが自分で自分が「育つ」力となり、その子どもたちの「育つ」力と保護者の方の「育てる」力のコラボの保育が、まさにクリエ幼稚園のめざすところであり、保護者の方の目に見える園への協力や理解を日々の保育活動に発展させていきたいと思っています。



域の新たな創生が期待できる。

文部科学省は、有識者会議をスタートさせ、日本の18歳人口が減少に転じる「2018年問題」を控え、私立大学の在り方を考える議論を始めた。経営が難しい私立大学の統廃合促進策やガバナンスの在り方等を検討し、2017年3月に報告書をまとめると公表した。

公立大学法人化は私立大学の「生き残り策」として今、最も注目されている。同時に自治体にとってサバイバルできる最後の砦である。

地方で定員割れから経営が悪化する大学が生き残るためには「地域に密着した地方創生」をキーワードに

打ち出すが、公立大学法人化で乗り越えるかの2つしかない。しかし、公立大学法人化事業に挙手するには、その私立大学が公設民営大学であることが、目下のところの条件である。

私立大学は、個別的な独自性だけを主唱するのではなく、その地域での貢献を示す新しい価値は何かを打ち出さなくてはならない。地域と密着した「すきま」のニーズを掘り起こし「地域創生」を打ち出すことが必須である。岐阜県・岡山県・高知県での調査で分かったことは、その県域で「一つ」しかない価値を打ち出せる大学は存続できるということである。高知県は土

木系の大学が無かったために、高知工科大学を公立大学法人化し、予想外に学生を集めることができ、公立大学法人化の成功例となった。岡山県では中山間部の高齢者のニーズを考え、看護師・介護福祉士・地域保健(保健師)といった専門家を養成する「新見公立大学」を建学した。その結果、新見市は若者人口が急増し、地域ではアパート建設ラッシュとなり盛況である。その自治体にとって一つしかない独自性を持つ大学を目指すことが、これからの大学の生き残りであり、同時に若い人口を誘致でき、自治体にとっても有意義に存続できる決め手となる。

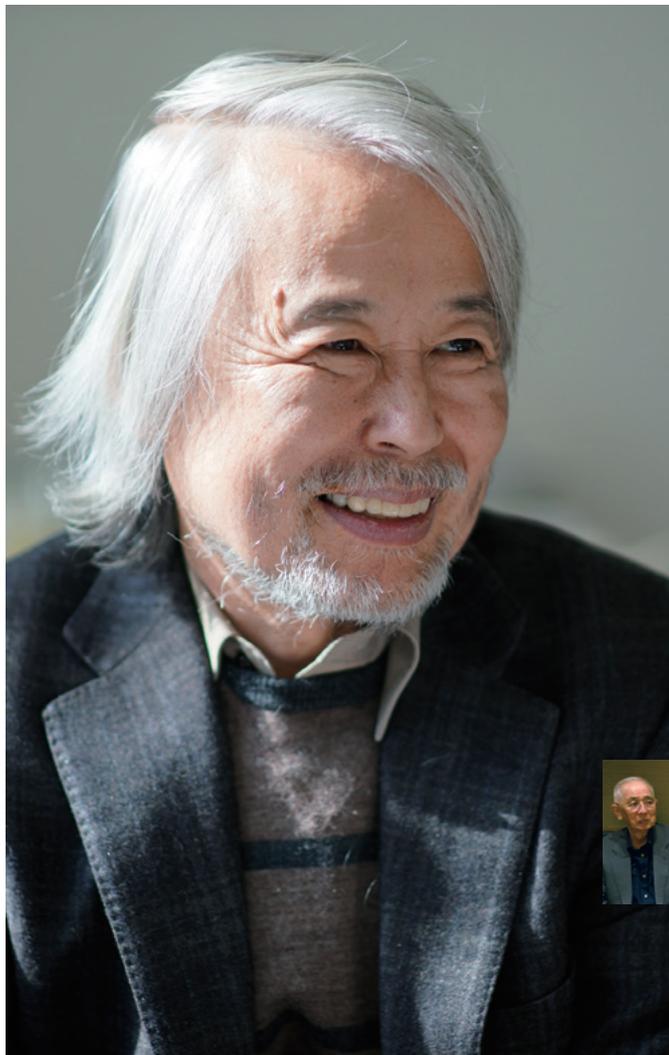
マスター

↑↓to

アーティスト

【第35回】

<普遍的価値>



1978『立っている女』
愛知芸大大学院修了制作



1974 大学2年生の時



大学院でお世話になった笠井誠一氏(愛知県立芸術大学名誉教授)と教え子の熊崎尚樹氏(本学洋画コース非常勤講師)と。「先生には若い頃から何十年も色々な意味で面倒を見てもらってきました。それを若い人に伝えていくことはとても大事なことです」



1976『ハイタカの飛ぶ風景』
名古屋芸大卒業制作 200号

熱意は、人を動かしますよ。およそ徹底的にやってみたら、周りも見ることが変わってきました



田口貴久 美術学部
教授
(たぐち よしひさ)

1953年 愛知県生まれ
1976年 名古屋芸術大学美術学部(絵画科洋画専攻)卒業
1978年 愛知県立芸術大学大学院美術専攻科修了

取材の1ヶ月ほど前に行われた個展の写真
を拝見した。教え子たちや本学の講師もお世
話になる画廊だそうで、画廊主は田口氏の絵
はもちろん、氏をめぐる人々の絵画にも魅力
を見いだしているのだろう。出展された作品
を眺めてみる。テーブルに置かれた食器や瓶
……、静物の洋画である。生を感じさせる筆
使い、安定感のある色合い。いにしえから変
わらぬ洋画の世界である。古色蒼然と捉える
向きもあろう。実際、現代アートの展覧会に
絵画だけの出品は少なくなっている。映像作
品や大掛かりなインスタレーションが幅を利
かせているのが現代のアートシーンである。
洋画は、めまぐるしく流転を続ける時代に
応えられていないのではないか、そんな意見が
聞こえてきそうである。しかし、それは絵を
読み解いていない、表層的な意見でしかない。
氏の話の伺って感じた。

燃料を扱う商家に生まれた。店の顧客に配
るためのマッチのラベルに印刷されていた北
斎や広重の浮世絵を見ていたことが原体験だ
と言う。「幼稚園ぐらいでしょうか。いつま
で眺めていても飽きないということを鮮明に

覚えています。関心があったんでしょうね、
たぶんその頃から」小学生になると西洋絵
画というものははっきりと意識し、高学年に
なる頃にはデューラーのような細密な画風に
憧れたと言う。中学生になると好みさらに
明確になり、後期印象派、セザンヌの絵に夢
中になった。面白いのは、ブルーボックスを
読みふける理系的な志向を持った少年だった
こと。セザンヌの構図や構成などを気にして
見ていたと言う。高校生になる頃には、職業
としての画家を意識するようになり、「絵の
訓練」をしたいと模写を始めた。ルオーやピ
カソを水彩で写し取った。「中学の終わり頃
からかな。どうやって絵を勉強していいのかわ
からなかったの、とりあえず自分が良い
と思ったものを写してみたいです。正しい
ことだったと思いますね。物事は真似から入
るものじゃないですか。すごく正常なこと
だったと思いますよ」昨今、オリジナリティ
こそが最も重要なこと、として扱われる風潮
がある。しかし、オリジナリティとは何か。
安易なものまねや剽窃は論外だが、絵画に留
まらずあらゆる芸術、文化は先人から引き継
がれ、過去の上に成り立つものである。過去

の蓄積に、新しい1点を加えたものが「発
明」であり、「独創」と言うのではないだろ
うか。「独創性はもちろん大事だけど、美術
史的にいろんな作家を見ても、セザンヌ、マ
ティス、ピカソ……、独創的だと言われる画
家もある時代はすぐく人の影響を受けて模写
をやっています。絵というものは文化、文化
というのは過去の蓄積の上に成り立っている
もので、何世代もの流れがあって蓄積があっ
て、それ以前の芸術との対話や対立があり、
そこで自分の立ち位置がわかり意識が成り
立っていると思います」

大学へ進学で、美術の道に進みたいと考
えるようになるが、家族からは猛反対。説得す
るものの浪人は許してもらえなかった。そんな
経緯があり、創立3年目の本学へ入学。「当
時は、学園紛争もあり酷い時代でした。だけ
ど面白くもありました。学校が成り立ってい
なくて、学生同士で勉強するような感じでした。
学生も、浪人している人が多くて、そう
いう先輩から絵のことを習いました。自分で
学ぶということしかできませんでしたが、の
びのびとしていましたね」 そんな中、月に



2016『アイロンのある卓上』



2014『樹ある風景』第67回展(2014)



2014『赤い屋根』
三岸節子記念館ヴェロン会展

高輪画廊 田口貴久展
2016年10月11(火)~21日(金)



「高輪画廊では、大橋みやこ、山田真二、熊崎尚樹、柳瀬雅夫、傍島幹司……、僕の教え子や繋がりのある人がお世話になっています。波長が合うんでしょうね」



2015『赤い風景』第68回展(2015) 120F



2014
『ヴェロンの
風景2』

ヴェロンの三岸節子アトリエでの製作



三岸家の食卓。
ユキコ夫人と



フランス・ブルゴーニュ地方のヴェロン市に、三岸節子のアトリエが現在も残されている。そこで制作した作品を展示したのが「ヴェロン会展」の始まり。2014年以降、毎年開催されている

- | | | |
|------------------------------|--|--------------------------------------|
| 1979年 気象会展(サエグサ画廊、東京) | 1994年 1995年まで1年間、大学・財団による長期海外研修のためフランス滞在 | 2004年 「～追及されたかたち～田口貴久展」(網走市立美術館、北海道) |
| 1981年 四川会展(名古屋) | 和音の会展(ギャラリー和田、東京) *98年まで出品 | 「田口貴久展 -同心円上の軌跡-」(名古屋画廊) |
| 1982年 個展(ギャラリーはくせん、名古屋) | 旗の会展(六儀園画廊、東京) 以後毎年出品 | 損保ジャパン選抜奨励賞展(東郷青児美術館) |
| 1983年 アッサイ展結成(名古屋) | 1996年 旗の会展(六儀園画廊、東京) 以後毎年出品 | 2007年 「田口貴久 油彩展」(松坂屋本店) |
| 1984年 第1回 伊藤廉記念賞展(名古屋) | 個展(ギャラリー和田、東京) | 笠の会(松坂屋) *2007年以後毎年出品 |
| 1985年 名爽会展(名古屋画廊主催) *92年まで出品 | 1998年 サロン・ド・リュウ・傘の会(東邦アート 名古屋松坂屋) *2000年まで毎年出品 | 個展(ギャラリー和田、東京) |
| 1986年 アッサイ21結成 *95年まで出品(名古屋) | 回顧展(電気文化会館、名古屋画廊主催) | 2008年 「田口貴久展 -記憶の重層化-」(名古屋画廊) |
| 上野の森美術館絵画大賞展にて日本放送賞佳作受賞(東京) | 蒲鉾展(斎藤画廊、名古屋) *2000年まで出品 | 2010年 赤兎馬(高輪画廊) *2010年以後出品 |
| 1987年 個展(六儀園画廊、東京) | 1999年 シェルの会(ギャラリーさんあさひ、名古屋) | 2011年 「田口貴久展 -感覚の純度が放つ輝き-」(名古屋画廊) |
| 上野の森絵画大賞展入賞者展(吉井画廊、東京) | 個展(ギャラリー和田、東京) | 立軌展(東京都美術館) 出品 *2011年以後毎年出品 |
| 1993年 個展(名古屋画廊) (ギャラリー和田、東京) | 日々の会(ギャラリー武者小路、東京) | 2013年 「田口貴久展 -ビューな心、真摯の制作-」(名古屋画廊) |
| | 2001年 個展(ギャラリー EMORI、東京) | 2014年 第1回「ヴェロン会展」(三岸節子記念美術館) |
| | | ヴェロン会展(高輪画廊) *2014年以後出品 |

1度東京から教えに来る江藤哲氏に薫陶を受けた。「学生なのでいっしょのことを言って絵を批判する人も多かったのですが、実際に会ってみると、絵描きとしての気概と言うか、根性を持っていると感じました。一所懸命にやっているのちゃんと見てくれる。先生に見てもらえることが楽しみでした」

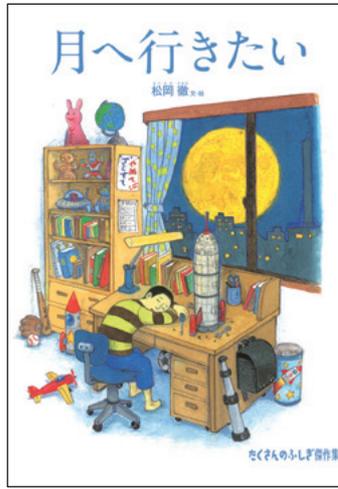
飛躍は、大学4年になってから訪れる。彫刻の先輩に、愛知県立芸術大学の大学院に入った人がいた。自分も受けてみようと考えた。周りはみんな無理だと口を揃えた。「戦う前から降参するのは嫌だから、努力しましたよ」 それまで漠然と理解していたことを徹底してすべて実行しようと考えた。「自分なりにノートを作って、これまで考えてきた絵画の作り方を見直して、曖昧さを排除して突き詰めてみました。構図は、黄金分割を意識しているんですが漠然としていたものを、ものさしで実際に測って決めました。明暗の関係も、対角線で通して白黒をリズムで、何

拍子で通したらまとまるかとか。感覚だけで塗っていた色も、その部分に合う色は1つだけのはずなので何百種類と色を作って絶対の1個見つけ出すぞと。デザイナーが使う色見本帳を使い、自分の絵の具で作った色を合わせてはめ込んでいって決める……」 実際にやってみることで、自分でも驚くほど成長できたと言う。「やり方がわかっているにも関わらず、やりきれていない自分の曖昧さや不徹底な部分が限界を作っているだけです」

幼い日の広重、少年時代のセザンヌ、青年期の巨匠たちの絵画、一貫しているのは絵画が持つ普遍的価値への憧れだったと言う。「絵を見たときのある種の永遠感。普通のものとは刹那刹那に変わっていきってしまうが、固定された絵画というのはある種の永遠のイメージを持っています。それに惹かれたんだと思います。一瞬の時間が永遠に続いているような、そういうことへの憧れのように思い

ます」 徹底してやり抜くための方法は、パウル・クレーの「クレーの日記」や「造形思考」、造形心理学の本などから知識を得た。方法論を、過去の作家から学ぶことで、普遍性の裏付けを手に入れようとしたとも言える。こうしたことを踏まえて作品を今一度眺めてみると、違った姿が見えてこないだろうか。音楽の世界では、長い時間に耐える作品、どんなに時代が変わっても変わらぬ価値を持つ作品を「エバーグリーン」と形容することがある。長い時間が、エバーグリーンな魅力を作ってきたように思いがちだがそうではなく、現在残っている作品たちは、過去を知り、普遍性を知ることで、初めから時代を超えることを目論んで作られていたのではないかと。作家の行動と作品は、時代に流されない要素を成り立ちから含んでいる。普遍的価値は、偶然の産物ではなく、意図して作る事ができるのだと教えてくれている。

教員著作の出版物のご紹介です。
(編集期限までに報告されたもの)



■松岡 徹
(名古屋芸術大学美術学部准教授)
『月へ行きたい』
●発行/福音館書店



■共著 西村和泉
(名古屋芸術大学美術学部准教授)
『サミュエル・ベケットと批評の遠近法』
●発行/未知谷

2016年度 音楽学部演奏会スケジュール(予定)

- 2月
- 第15回 歌曲の夕べ**
日 時/2017年2月2日(木)
18:30開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料(全自由席)
- 研究生修了演奏会**
日 時/2017年2月9日(木)
18:00開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料(全自由席)
- 大学院音楽研究科特別演奏会**
日 時/2017年2月16日(木)
18:00開演予定
会 場/名古屋芸術大学音楽学部
3号館ホール
入場料/無料(全自由席)
- Kaleidoscope2017**
日 時/2017年2月18日(土)
16:00開演予定
会 場/名古屋芸術大学音楽学部2号館
入場料/無料(全自由席)
- ピアノのしらべ 第21回 春のコンサート**
日 時/2017年2月22日(水)
17:30開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料(全自由席)
- オペラ公演「魔笛」**
日 時/【学部生公演】
2017年2月24日(金)
18:00開演(17:15開場)
【教員・卒業生公演】
2017年2月25日(土)
15:00開演(14:15開場)
【大学院生・学部生選抜公演】
2017年2月26日(日)
15:00開演(14:15開場)
会 場/名古屋西文化小劇場
入場料/24日:無料(全自由席) ※要整理券
25日:3,000円(全自由席)
26日:1,000円(全自由席)
- 3月
- ミュージカル公演**
日 時/2017年3月2日(木)
開演時間未定
会 場/アートピアホール
入場料/未定
- 第19回大学院音楽研究科修了演奏会**
日 時/2017年3月3日(金)
17:30開演予定
会 場/三井住友海上 しらかわホール
入場料/無料(全自由席) 整理券あり
- 第44回卒業演奏会**
日 時/2017年3月9日(木)
17:00開演予定
会 場/三井住友海上 しらかわホール
入場料/無料(全自由席) 整理券あり
- ジャズポップスコース卒業演奏会**
日 時/2017年3月11日(土)
開演時間未定
会 場/名古屋芸術大学音楽学部
3号館ホール
入場料/無料(全自由席)
- ※予定につき変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。
お問合せ先/名古屋芸術大学音楽学部演奏課
Tel. 0568-24-5141
- ※オペラ公演については、
(株)クレアール Tel. 0568-26-3355
名古屋西文化小劇場 Tel. 052-523-0080
にお問い合わせください。
- チケットお取り扱い場所**
- 名古屋芸術大学音楽学部演奏課
Tel. 0568-24-5141
 - 名古屋音楽学校
Tel. 052-973-3456
 - 愛知芸術文化センター-B2Fプレイガイド
Tel. 052-972-0430
 - ヤマハミュージック名古屋支店プレイガイド
Tel. 052-201-5152
 - カワイ名古屋
Tel. 052-962-3939
- ※一部取り扱いのない公演がございます。

2016年度 名古屋芸術大学卒業制作展・大学院修了制作展日程

- 第44回 名古屋芸術大学卒業制作展
会場/愛知県美術館ギャラリーA~G室
(愛知芸術文化センター 8階)
学科/美術学部美術学科(日本画・洋画)
デザイン学部デザイン学科
日程/2017年2月21日(火)~2月26日(日)
10:00~18:00
(金曜日は20:00まで、日曜日は17:00まで)
- 会場/愛知県美術館アートスペースG・H室
(愛知芸術文化センター 12階)
学科/デザイン学部デザイン学科
日程/2017年2月21日(火)~2月26日(日)
10:00~18:00
(金曜日は20:00まで、日曜日は17:00まで)
- 会場/名古屋市民ギャラリー矢田
第1展示室~7展示室
学科/美術学部美術学科(アートクリエイター)
デザイン学部デザイン学科
日程/2017年2月21日(火)~2月26日(日)
9:30~19:00(日曜日は17:00まで)
- 会場/名古屋芸術大学西キャンパス
アート&デザインセンター
学科/デザイン学部デザイン学科
日程/2017年2月21日(火)~2月26日(日)
10:00~18:00
- 卒業制作展記念講演会
会場/愛知芸術文化センター12階 アートスペースA
日程/2017年2月26日(日)
13:00開場 13:30~15:00 ※要申込
講師/箭内道彦
演題/【新人と旧人】
- 第21回 名古屋芸術大学大学院修了制作展
会場/名古屋市民ギャラリー矢田
大学院美術研究科・デザイン研究科
日程/2017年2月28日(火)~3月5日(日)
9:30~19:00(最終日は17:00まで)



「名古屋芸大グループ通信」
ウェブサイト



発行/名古屋芸術大学
企画・編集/全学広報誌編集委員会
デザイン/協力:くまな工房一社
印刷/株クイックス
発行日/2017年1月27日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市西之庄古井281番地
電話 0568-24-0359
FAX 0568-24-0369
E-mail: grouptu-shin@nuu.ac.jp



大学基準協会の認定評価を
再取得しました

本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再度取得しました。認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。